

ゲルマニウムを用いた経穴刺激の生体に及ぼす影響と治療効果に関する研究

まえだ内科¹⁾

久留米大学医学部麻酔学教室²⁾

前田 繁男¹⁾・無敵 剛介²⁾

緒言：経穴を利用した治療法としては伝統的な補瀉の術を施す鍼灸刺激の他、電気、磁気や金属粒子を利用する方法がある⁽¹⁾。我々はゲルマニウム粒子を用いその生体に及ぼす影響と治療効果に関する研究を行っているのでその一部を発表する。

方法：日本ゲルマニウム研究所製のゲルマニウム粒子、スーパーミニ（直径3mm）を種々の経穴上に装着しその影響を、良導絡測定および痛み関連誘発脳波電位で検討してみた。測定した症例は76歳、男性で帯状疱疹後神経痛の患者である。

結果：良導絡測定では治療前は腎（F3）膀胱（F4）の値の低下が顕著であったが両側の復溜にゲルマニウム粒子を貼ると約十分後の測定ではF3、F4の値は軽度改善した（図1、2参照）。別日に痛み関連電位を復溜にゲルマニウム粒子を貼る前後で測定するとゲルマニウム粒子を貼った後では電位の低下

が確認された（図3、4参照）。

考察：以上の結果からゲルマニウム粒子を経穴に貼ると生体に種々の影響を及ぼすことが推察されたが、ゲルマニウムの効果としては筋力にも影響することが検討されており、指の筋力変化を調べるOリングテストでも確認できる⁽²⁾。我々は経穴上にゲルマニウム粒子を貼りその治療効果の有効性の確認の参考にOリングテストを用いているが、その治療効果の特徴について考察してみた。具体例として24歳の女性で両下肢の痛み（右足外側が特に痛む）と腰痛、頸腕痛（左側が特に痛む）および便秘を訴える症例を呈示する。良導絡測定では腎（F3）胆（F5）の低下と淋巴管（三焦、H5）大腸（H6）の上昇が認められる（図5参照）。臨床症状と良導絡測定の結果を参考にし奇経の適応と考え外関臨泣（帯脉陽維脈）にゲルマニウム粒子を貼りOリングテストで指の筋力が上昇すること

を確認した。数分後には上下肢の痛みは著明に改善した。

奇経治療ではイオンバンピングに代表されるように治療に用いられる二つの経穴に鍼灸の補瀉に相当するような相反する刺激を与え治療する⁽¹⁾が、ゲルマニウム治療では同じゲルマニウム粒子を用いても効果的である。つまりゲルマニウムは補瀉両方の治療に用いることができるものと考えられる。しかも他の異種金属や磁気治療に比べ効果持続時間が長いと推定される。この様な性質はゲルマニウムの他の金属には見られない特質と考えられ今後の研究と臨床応用が期待される。

参考文献

- 山田新一郎：経絡大循環—その構造と調整針法—、医道の日本社（1989）。
- 大村恵昭：バイデジタルOリングテストの実習、医道の日本社（1992）。

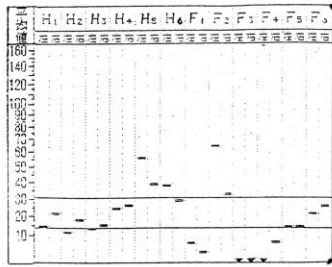


図1 症例1の良導絡チャート

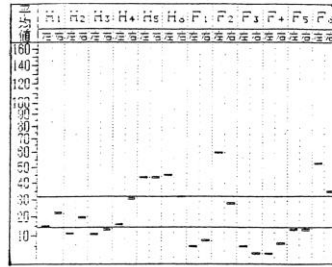


図2 ゲルマニウム粒子刺激後の良導絡チャート

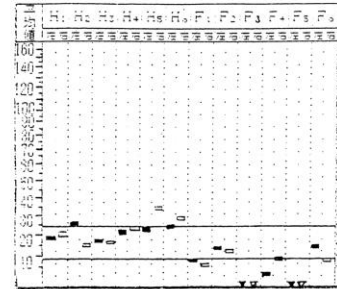


図5 症例2の良導絡チャート

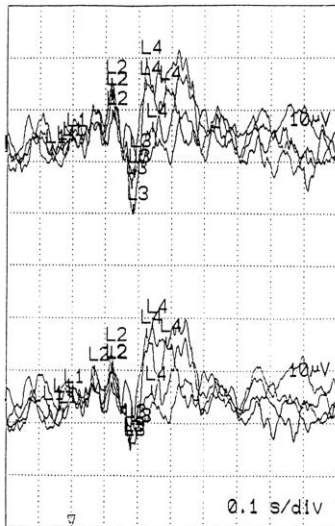


図3 症例1の痛み関連電位

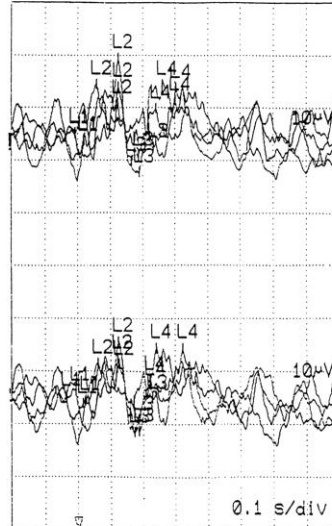


図4 ゲルマニウム粒子刺激後の痛み関連電位